

を齎すと糾弾する。他方ハウアーは、『アーリア的キリスト?』(一九三八年)で、「イエス」研究の目的は「イエス」の言行が「真のユダヤ精神」の表出であって、「真のアーリア精神」には相応しくないことを「学問的」に確証することであるとする。彼は同時代のプロテスタント教会内で見られた「アーリア人イエス」の模索を「非学問的」であると批判し、「イエス」の言行は全て「純粋なユダヤ教」の表出であるとする。しかし、「民族的特質」を備えたユダヤ教から生まれた「イエス」の教説は、「非民族的或いは超民族的な特質」を持つに至り、「自然的秩序」(「民族」「血」)を否定することによって、「ユダヤ教」から拒絶されたとする。

両者の「ユダヤ人イエス」像は極めて興味深い形で共鳴している。両者が描き出す「ユダヤ人イエス」像には両価性(「イエス」の卓越性、誠実性、一貫性と、「イエス」の「非民族性」「非自然性」)が見られるが、それは両者の議論の根底にある二項対立的思考と密接に関連している。まず、肯定的であれ否定的であれ「ユダヤ人イエス」を担保する根拠として、「ユダヤ人イエス」対ヘレニズム的「異教徒パウロ」という対立図式が見られる。こうした図式によって、「真の純粋なユダヤ教」が前提されて、つまり概念的に創出されている。また、人間の生の全体性を包摂し、それを規定するものとしての包括的宗教と人間の生の一部へと縮減された所謂宗教と表現し得る対立図式も見られる(「民族的ユダヤ教」対「誇張されたユダヤ教」、「アーリア精神」対「キリスト教」キリスト教精神)。但しこの包括的宗教は現実的所与ではなく、彼らが望ましいとは看做

していない現実(世俗的なユダヤ人国家の建設、キリスト教が宗教的覇権を主張するドイツ社会)への否定的関与であると同時に、理念を可視的現実であるかのように見せる肯定的・積極的関与の言説であった。またハウアーにとって、クラウスナーが説く「ユダヤ人イエス」は、「イエス」をユダヤ教の純粹形態と捉える根拠を提供し、非現実的「イエス」キリスト教に對して、「民族」という現実に根ざした「アーリア精神」を對置させる可能性を提供したのである。

「ユダヤ人イエス」像は、学説史・学問史的に、或いはユダヤ・キリスト教間の「対話・和解」の歴史の中に位置づけることも可能である。けれどもその同じ表象は、その都度の歴史的脈絡の中において極めて多様な領域にわたる言説としても機能していたのである。

ルドルフ・オットーとデ・ヴェッテ

藁科 智恵

本発表では、ルドルフ・オットー(一八六九—一九三七)におけるデ・ヴェッテ理解を取り上げる。ルドルフ・オットーは、一九一七年に『聖なるもの—神的なものの觀念における非合理的なものとその合理的なものとの關係について』(Rudolf Otto, *Das Heilige: über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen* (Breslau: Trewendt und Granier, 1917)以下、『聖なるもの』)を出版

しているが、その八年前、一九〇九年に『カント・フリースの宗教哲学』を発表し、そこでは、フリースの哲学を採用することにより、カント的な意味における認識の枠を広げ、感情において感得されるものをも「認識」の枠組みに組み込もうという試みがなされている。この著作の前半は、オットーによるフリースの哲学の紹介に当てられ、後半は、フリースの哲学と神学との関係が取り上げられている。その後半部分で言及されているのが、神学者ヴィルヘルム・マーティン・レーベリヒト・デ・ヴェッテ（一七八〇—一八四九）である。オットーは、デ・ヴェッテの著作を通じて、デ・ヴェッテの時代が抱えていた諸問題をそこから読み取ることができ、そしてそれは、その時代だけの問題ではなく、当時オットーが生きていた時代においてもアクチュアルな問題である、と述べている。本発表では、オットーが、デ・ヴェッテの著作を通して浮き彫りにしようとした、当時の問題を孕んだ状況に焦点をあてていきたい。その際に取り上げるのが、オットーが、デ・ヴェッテの著作の中で、特に当時の様子を理解するのに重要だとして挙げている『テオドル或いは懷疑者の献身—ある福音主義聖職者の教養の歴史』（Wilhelm Martin Leberecht de Wette, *Theodor, oder, Des Zweiflers Weihe: Bildungsgeschichte eines evangelischen Geistlichen* (Berlin: G. Reimer, 1822) 以下、『テオドル』）と題された小説である。

オットーは『テオドル』において、この時代の精神の動き方が表わされていると言う。主人公テオドルは、神学を学びつつも合理主義的な批判に接し、信仰が揺らぎ始める。そこで

出会ったのが、カント主義だが、そこにも満足できず、シェリングのロマン主義に傾倒する。しかしそれにも満足できずに、出会うのが、フリースの哲学である。オットーは、デ・ヴェッテがいた時代の問題を以下のように考えた。つまり、カントの認識論が受容された後、宗教について語るときには、次の二つの選択肢しか残されていない状況があった。その二つの選択肢とは、「宗教」というものが、カント主義的な理解によって道徳的にのみ語られ得るか、それともロマン主義的に「感情」的なものとしてのみ語られ得るかというものであった。そして、オットーはこの問題を、ただデ・ヴェッテが生きた時代の問題としてだけではなく、自らの時代においても連続している問題として捉えていたということがわかる。このように、オットーがデ・ヴェッテの著作を通して述べる問題は、『聖なるもの』においてオットーが冒頭で「聖なるもの」という単語が当時持ったカント的な道徳主義的意味に批判的に言及していることから理解できる。そのような状況において、デ・ヴェッテが見出した第三の道が、フリースの哲学であった。そして、オットーもフリースの哲学は、オットー自身が直面している二〇世紀初頭のドイツの状況に対して、有効なものであると考えた。このようなオットーによる当時の問題の理解は、オットーの議論が当時の社会の精神的状況の中で持った意味を把握する上で、重要となるであろう。